

『神が喜ばれる信仰者』

’21/05/09

聖書箇所: マルコの福音書 9 章 30-50 節 (新約 p.84-)

前回、私たちは、イエス様が嘆かれた不信仰について学びました。…それは、イエス様というお方をよく知っていたながら、そのイエス様に全幅の信頼をなかなか置くことができなかった、あの12弟子たちの問題…、また、悪霊に憑りつかれた子どもが居て、イエス様にお願いする時、そのイエス様のことを完全に信頼しることができなかった父親の問題でありました…。その両者に必要であったのは、イエス様のことを真の神…、唯一の救い主として、正しく理解すること、また、そのイエス様にすべてのことをお任せする(=委ねる)ということだったように思います…。

命題: 『神様が喜ばれる信仰者』とは、どのような者たちでしょう？

そうして、今日のみことばが、今度、私たちに教えてくれていることは、一体、どういったような信仰者を神様が喜んでくださるのか？ということ。願わくは、今日のみことばを学んでいくことによって、私たちが、今一度、イエス・キリストというお方のことを正しく知ることができ…、そうして、ますます、私たちが神様に喜ばれる信仰者になっていくことによって、より祝福に満ちた人生を歩むことができ、また、私たちを通して、神様の栄光が大胆に現わされていくことを願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ 9:30 以降をお開きください…。

I・救いの道を備えられたイエス・キリスト！(30-32 節)

まずは、今日のみことばの内、30-32 節を見ていきましょう。このみことばが、まず、教えてくれていることは、**私たちのために、“救い”の道を備えてくださったイエス様**のことです。当然のことですが、天の父なる神様は、そんなイエス様のことを一番に愛し…、また、喜んでくださっています。まずは、そういったことを確認していきましょう。30-32 節には、このように記されています。

30 さて、一行はそこを去って、ガリラヤを通って行った。イエスは、人に知られたいと思われた。

31 それは、イエスは弟子たちを教えて、「人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる」と話しておられたからである。

32 しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。また、イエスに尋ねるのを恐れていた。

●神のご計画

今読んだみことばをご覧くださいと、この時、イエス様の一行は、ガリラヤよりも北側にあった、ピリポ・カリザリヤやヘルモン山があった地方から、南へ下って、また再び、ガリラヤへと戻ってきた、ということが分かります。ここ 30 節の後半をご覧くださいと、『…イエスは、人に知られたいと思われた。』とありますが、この時、イエス様は、群衆たちに広く浅く？神のメッセージを宣伝するよりも、あの12弟子たちのことを訓練しようとしておられました。…と言いますのは、もう、間もなく、イエス様が、この地上での生涯を終えて、あの十字架の上に磔にされる日が近づいていたからです。そうなったら、今度、神様からの救いのメッセージを宣伝するのは、イエス様ではなく、弟子たちの働きになっていきます！だから、イエス様は、この時、弟子たちの訓練と言うか、弟子たちの学びに力を入れておられたわけで…、そこに、また、多くの群衆たちが居ない方が都合良かったのです。

さて、31 節をご覧くださいと、ここで、イエス様は、2度目となる受難の告知…、すなわち、ご自分が、必ず、殺されなければならないということや、その後、3日目によみがえるという、あの十字架と復活

に関する預言をしてくださっています。でもね、皆さん。どうぞ、少し前のマルコ 9:9-10 をご覧くださいませ？そこには、何と書かれてありますか？『9 さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子(つまり、ご自分)が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた。10 そこで彼らは、そのおことばを心に堅く留め、死人の中からよみがえると言われたことはどういう意味かを論じ合った。』とあります。

つまり、ついさっき、私は、今日のみことばが、イエス様が話された「2度目の受難告知」…、つまり、イエス様が、私たちを救うために十字架にかかれて、その後、3日目によみがえられるという話をされた、“2回目である”という主旨の説明をしました…、でも、実は、1回目と2回目の間にも、イエス様は、そういったことを話されていたのです！そうでしょ！

実は、イエス様の受難告知は、この後、マルコ 10:32 以降に、3回目が記されてあるのですが…、でも、イエス様の受難告知…、つまり、十字架と復活に関する予告は、たった3回だけではありません。少なく教えて、3回なのです！

実は、今日のみことばの 31 節の冒頭には、『それは、イエスは弟子たちを教えて…』と訳されていますが、この部分を原語であるギリシヤ語で観察してみると、「未完了過去」という時制で書かれています。この時制は、「過去において、何度もなされていた、継続されていた…」ことを表わす場合に使われます。…ということは、イエス様は、弟子たちのことを何度も何度も…、今さっき確認したように…、また、継続的に教えておられた、ということなのです。…皆さんも、よくご存知のように、この時の弟子たちは、イエス様をご自分のことを明らかにされても…、また、十字架や復活のことを教えてくださっても、なかなか、すぐには理解することができませんでした。

だから、あのシモン・ペテロなどは、初めて、そういった話を聞いた時、マルコ 8 章で学んだように、イエス様のことを道の脇にお連れして、イエス様のことをたしなめたとするか、注意したら…、逆に、そのイエス様の方から、「黙れ！サタン！」と言われて、激しく叱られたわけでしょ？…ま、そういったこともあって、弟子たちは、イエス様に、そういった受難について、詳しく尋ねることを恐れていたのだと思われます。

でも、この時の弟子たちの身になって考えてみますと…、真唯一の造り主なる神様が、まさか、人間となって、今、自分たちの前に居てくださっているとか…、そのお方が、みじめに、十字架の上に磔にされて殺されてしまうとか、そこから、3日目によみがえるとかというのは、確かに、すぐには受け入れがたいメッセージですよ…。でも、それこそが、神の御計画…、神様のみこころであったのです。

●イエス様の 御力

どうぞ、今度、皆さんに注目していただきたいみことばは、ここ 31 節の『引き渡され…』という部分と、『しかし、殺されて…』という部分です。実は、これら2つの動詞は、ギリシヤ語では、受動態で書かれています。…と言いますのは、イエス様のことを捕らえて、その身柄を引き渡すのも、あるいは、イエス様のことを殺してしまうのも、イエス様以外の第三者の仕業であるからです。…でも、そういったことを、すべて、イエス様は前もってご存知で…、そういったことを、ここで預言しておられるのです。

実は、使徒 2:23 には、こんなみことばが記されています、『あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。』って…。皆さん、気付いてくださいました？…ここで、弟子のシモン・ペテロは、イエス様が、あの十字架の前、悪人たちの手に引き渡されたことを、突発的な事故が何かのようだと教えてくれています？…いいえ！ペテロは、そういったことがすべて、「神様の御定めになった計画」であったと教えてくれているのです。そうでしょ！

いつもいつも言いますように、天の神様は、すべてのことを御存知です！神の前には、すべてのことが

明らかで、裸なのです(ヘブル4:13)。ひょっとしたら、私たちが、ある程度は、未来のことを予想することができるかも知れませんが、でも、自分ではなくて…、他人が行動するようなことで、正確に、様々なことを言い当てることができるでしょうか？…でも、この聖書の中には、イエス様だけでなく、様々な預言が、それこそ、100 や 200…、いえ、もっと多くの預言があって、それらが皆、見事に成就しています。こんなことが、ただの偶然か何かで起こり得るでしょうか！

どうぞ、今度は、31 節の後半部分に注目してください？…そこには、イエス様が、ご自分のことを指して、『…しかし、殺されて、三日の後に、…よみがえる』とありますでしょ？先程の動詞は受動態で書かれてあるという話をいたしました、この『よみがえる』という動詞は、中動態で書かれてあります。…この中動態と言いますのは、現代の日本語には無い表現方法なので、私も説明が難しいのですが、これは簡単に言うと、イエス様が、「ご自分の力でもって、よみがえられた」ということを、このみことばは教えてくれています。

例えば、イエス様は、何人もの死者をよみがえらされましたが、彼らは皆、自分たちの意志や力によみがえったわけではありませんよね？…彼らは皆、自分以外の者の意志や力によって、よみがえら“された”のです。だから、そういった表現には、受動態を使うわけですが、でも、イエス様の場合は、そうではありません！イエス様は、ご自分の意志で！ご自分の力で！あの死からよみがえられたのです。

正直、そういったことも、私たち人間には、少々理解が難しいと思います。…と言いますのは、私たち人間は皆、死んで…、自分の意志でよみがえるなんて、絶対に不可能だからです。でも、聖書のみことばは、そう教えません。イエス様というお方は、ご自分の意志で、あの十字架へ向かっていかれただけじゃない！ご自分の意志や力で、その死からよみがえられたのです！それは、つまり、このイエス・キリストというお方が、死に対してさえも勝利することができる！このお方は、決して、死なれない！…死んだままでおられない！ということの意味しています。

どうぞ、皆さん。私たちがつい最近学んだ、「イエス様の変貌」という出来事を思い出してみてください。あの時、イエス様の姿が光り輝いて、神としての光…、栄光を放ったように思われます。その時、天から、父なる神様の声が出て、何と言われました？マルコ9:7、『これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい』という声が出た、とみことばには記されています。この言葉からも分かる通り、イエス様は、父なる神様のみことを完全に理解し、そのみことば通りに歩きました。…その時の礼拝で、私たちが学んだように、確かに、イエス様は、神そのものであられましたが、…それと同時に、イエス様は、私たちと同様、人間でもあられました。そこが、イエス様というお方の…、唯一無二のユニークな部分ですが、だからこそ、聖書のみことばは、こう教えるのです…、「真唯一の神様と私たち人間とを繋ぐお方は、このイエス様を置いて他には居ない！このお方以外に救いは無い！」って…(1テモテ2:5、使徒4:12)。…だから、このイエス様を信じる以外に、どの神様を信じて、どの宗教にすがっても救いは無いのです。

II・素直な信仰者！(33-37 節)

どうぞ、今度は、今日のみことばの33-37 節をご覧ください。そこで、イエス様は、弟子たちに“素直さ”ということをお教えています。神様が喜んでくださる信仰者とは、“素直”な信仰者であります。今日のみことばの33-37 節には、こう記されています。

33 カペナウムに着いた。イエスは、家に入った後、弟子たちに質問された。「道で何を論じ合っていたのですか。」

34 彼らは黙っていた。道々、だれが一番偉いかと論じ合っていたからである。

35 イエスはおすわりになり、十二弟子を呼んで、言われた。「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みんなのしんがりとなり、みんなに仕える者となりなさい。」

36 それから、イエスは、ひとりの子どもを連れて来て、彼らの真ん中に立たせ、腕に抱き寄せて、彼らに言われた。

37 「だれでも、このような幼子たちのひとりを、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。また、だれでも、わたしを受け入れるならば、わたしを受け入れるのではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

● 純粋さを取り戻す

ここ33 節で、イエス様の一行は、ガリラヤのカペナウムに着きます。…しかし、そこで、イエス様からなされた、『道で何を論じ合っていたのですか？』という質問に、弟子たちは答えることができませんでした。…と言いますのも、その道中で、弟子たちは、「自分たちの中で、誰が一番偉いか？」なんていう、くだらない議論をしていたからです。…皆さん、信じられます？その少し前、イエス様は、私たちの罪のため、私たちが罪の裁きから救うために、私たちの身代わりとなって殺される、という話をされていたのに、そういった話の直後に、弟子たちは、誰が一番偉いか？なんていう、つまらない話をしていたのです。

一体、どうして、そんな風なことになってしまうのか？…実は、弟子たちは、イエス様が話される「神の国」という言葉を、イエス様がローマ帝国を倒して後、この地上に興される王国のようなものをイメージしていたからです。当然、その国で一番偉いのはイエス様です。でも、そのイエス様に次ぐ地位に就くのは誰か？…そういった話を弟子たちは、してははずなのです。

だから、イエス様は、35 節で、『だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みんなのしんがりとなり、みんなに仕える者となりなさい。』という話をされたのです。…そうして、イエス様は、1 人の子どもを連れて来て、彼ら弟子たちの真ん中に立たせて、37 節の、『だれでも、このような幼子たちのひとりを、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。また、だれでも、わたしを受け入れるならば、わたしを受け入れるのではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。』という話をされます。

ここで、『受け入れる』と訳されてあるギリシヤ語の言葉(δέχομαι)は、「①受け取る、②受け入れる、③(人)を迎える、歓迎する、接待する…」という意味の言葉です。果たして、私たちは、自分に利益をもたらしてくれそうな、立派なゲストのことを喜んで迎え入れたとしても…、小さな幼子のことを同じように迎え入れるでしょうか？…ついつい、私たちは打算的と言うか、損得を考えてしまいがちです。しかし、本当に救われて、神様によって変えられたクリスチャンたちは、そういったような「えこひいき」をしません。

この時の弟子たちは、「誰が一番偉いか？」などという、つまらないプライドに支配されておりました。…恐らく、イエス様は、ここで、子どもの素直さ…、純真さというものを、弟子たちに見せることによって、「あなた方も、このようでありなさい！」という話をしておられます。…と言いますのも、生まれて間もないような小さな子どもたちには、自分が他者と比べて優れているとか、プライドといったようなものが無いからです。

実は、ここ36 節と37 節、新改訳聖書の第3版では、『ひとりの子ども』とか、『幼子のひとり』という風に、少し違った表現で翻訳されていますが、原語のギリシヤ語では、同じ言葉(παιδίον)が使われています。この言葉は、「男女の区別無く、生まれたての乳児から、もう少し大きくなった子ども…」を指すと思われます。ですから、どうぞ、皆さんには、保育園に通う位の子どもをイメージしていただきたいと思えます。

いかがです？その年頃の子どももって、素直じゃありません？…例えば、その年頃のクリスチャンホームの子どもたちに、「イエス様を信じてる？」って聞いたら、ほぼ100%の確率で、「うん！信じてる！」って言ってくれますでしょ？

しかし、段々と、そういった子どもたちが大きくなって、中高生や社会人になってくると、いろんなこと…、特に、自分を基準に“損得”というようなものを考えるようになってきますでしょ？…例えば、「イエス様を信じると言ってしまうと、教会に来ないといけなくなる…。クラブ活動に参加できない。あるいは、趣味や時間の遣い方を変えないといけなくなる…。また、イエス様を信仰すると、これまでの生き方を変えないといけなく…」そんな感じです。天の神様は、私たちが、そういったような…、信仰の副産物ではなく、純粋な思いで、信仰を見て、信仰を持つことを願っておられるのです。

●イエス様を、心に受け入れる

どうぞ、ここ 37 節のみことばをご覧ください。ここで、イエス様は、素直な思いで、イエス様のことを受け入れるべきことを教えてくれています。特に、ここ 37 節で注目していただきたい言葉は、『わたしの名のゆえに…』という部分です。だって、それこそが、誰かを受け入れるか受け入れないか？という判断基準なわけでしょ？だから、私たちクリスチャンは、例え、1度も会ったことが無くても、その方がクリスチャンだと聞くと、出来得る限り、その者に親切にしてあげようとか、できれば、仲良くしようとするわけです。皆さんだって、そうでしょ？

この当時…、いえ、もう少し後の時代になると、クリスチャンたちは、かなり厳しい迫害を受けることになっていきます。だから、あの12人の弟子たちは、そのほとんどが殉教していくわけです。…でも、そんな時代にあって、イエス様の名のゆえに…、つまり、同じイエス・キリストを信じている、主にある兄弟姉妹だということを受け入れる、つまり、仲良くするということは、かなり大変なことでありました。しかし、そんな兄弟愛を持った者こそ、本当に救われた者なのです。だって、使徒ヨハネは、1ヨハネ 3:14 で、こう教えるじゃないですか！『私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。』って…。

また、イエス様だって、マタイ25章で、こう教えてくださったでしょ？…『34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』(マタイ 25:34-40)

⇒イエス様を信じる者同士、そこには、間違いなく、兄弟愛が存在します。…と言いますのも、イエス様を信じて救われた者たちの内には、助け主なる聖霊の神様が、私たちの心に働きかけてくださるからです。だから、私たちクリスチャンは、クリスチャンたちが困っているのを、平気で見ておられないのです。

また、イエス様は、今日のみことばの37節後半で、イエス様と、そのイエス様のことを遣わした…、天の父なる神様とが、親密な関係で繋がっていることを教えてくださっています。…イエス様こそは、天の父なる神様と本質的に何ら変わらない、正真正銘の神様なのです！…ついさっき、確認したように、イエス様のお姿が光り輝いた、あの変貌の時、天から、『これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい』(マルコ 9:7)という声が聞こえたように、天の神様は、イエス様のことを愛し…、そのイエス様のことを受け入れる者を喜んでくださるのです。

Ⅲ・へりくだった 信仰者！(38-42 節)

今からは駆け足で、3つ目と4つ目のポイントを見ていきましょう。どうぞ、今度は、今日のみことばの内、38-42 節に注目してみてください。そこでは、“へりくだった”信仰者について教えられてあります。そこには、こう記されてあります。

38 ヨハネがイエスに言った。「先生。先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、私たちの仲間ではないので、やめさせました。」

39 しかし、イエスは言われた。「やめさせることはありません。わたしの名を唱えて、力あるわざを行いなごら、すぐあとで、わたしを悪く言える者はないのです。」

40 わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方です。

41 あなたがたがキリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは確かなことです。

42 また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。

● 独善的 でない！

さて、ここでも、ヨハネが少々検討外れなことを言い出します。…それは、38 節の、『先生。先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、私たちの仲間ではないので、やめさせました。』というものでした。恐らく、この時のヨハネは、自分がイエス様から褒められると思って、こういったことを言ったのではないのでしょうか？しかし、イエス様の反応は、それと正反対でした。

でも、どうして、イエス様は、ヨハネの意見を否定されたのでしょうか？…それは、ヨハネの考えが、あまりにも独善的であったからです。独善的…、つまり、自分たちだけが正しいというような…、独りよがりです。そこで、イエス様は、どういった者たちが、自分たちの仲間であるか、という話をしてくださっています。簡単に言うと、それは、①イエス様の名前を唱えて、力あるわざを行なっているかどうか、②イエス様たちに反対しない者たちです。

さもすると、私たちは、自分たちだけが真理で…、自分たちのグループ以外はダメだと見下してしまいがちです。しかし、もし別のグループもまた、私たちと同じイエス様を愛し、親切にしてくれるならば、その人たちもまた、同じキリストのからだに繋がっている、主にある兄弟姉妹なのです。そうでしょ！

● 他者 につまずきを与えないよう努力している

どうぞ、42 節に注目してみてください。ここで、イエス様は、“他者”につまずきを与えることの問題について教えてくださっています。ここで言われている『つまずき』とは、「罪に誘惑する、罪を犯させる…」という意味です。また、『わたしを信じるこの小さい者たち』というのは、イエス様を信じて間もないクリスチャン、あるいは、聖書のみことばで、様々なことを正しく判断できないような、未成熟なクリスチャンを言います。

そのような者たちをつまずませるようなことは、神の前には重罪です。…だって、そのようなことよりも、『大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがまし』だとイエス様は教えてくださったからです。つまり、それほど、他者をつまずかせることは罪深いのです。…それほどまでに、神は霊的な事柄を重要視されるわけです。…イエス様は、ルカ 17:1 で、『つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者はわざわいだ。』とおっしゃって、つまずきが起こってしまうことは避けられないにしても、私たちが意識的に、つまずきを与えることを注意 & 警告しておられます。でも、果たして、私たちの方は、霊的な問題を、それほどまでに大切に考えて、他者につまずきを与えないよう、細心の注意を払っているのでしょうか？

例えば、**テトス3:10**には、『分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。』とあって、**マタイ18**章に記されてあるような、「もし、兄弟が罪を犯し続ける場合は、何度も、必要なステップを踏んで、罪を悔い改めさせてあげなさい…」というみことばとは、かなり違っていて…、他者をつまずかせる…、あるいは、教会全体を巻き込んでしまうような問題に対しては、厳しく…、また、急いで対応しなさい！ということが教えられてあります。そのように、教会の運営には、かなりの注意が必要なのです。

IV・忠実な信者！(43-50節)

そうして、今から最後4番目のポイントを見ていきましょう。**神は、“忠実”な信者のことを喜んでくださいます。**どうぞ、今日のみことばの最後の部分である、43-50節をご覧ください。そこには、このように記されています。

- 43 もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片手でいのちに入るほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。
- 45 もし、あなたの足があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片足でいのちに入るほうが、両足そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。
- 47 もし、あなたの目があなたのつまずきを引き起こすのなら、それをえぐり出さなさい。片目で神の国に入るほうが、両目そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。
- 48 そこでは、彼らを食うじは、尽きることがなく、火は消えることはありません。
- 49 すべては、火によって、塩けをつけられるのです。
- 50 塩は、ききめのあるものです。しかし、もし塩に塩けがなくなったら、何によって塩けを取り戻せましょう。あなたがたは、自分自身のうちに塩けを保ちなさい。そして、互いに和合して暮らしなさい。」

● 罪の誘惑 に対して、慎重である。

今読んだみことばの前半で、イエス様は、大変厳しいことをおっしゃっています。…と言いますのも、もしも、手があなたのつまずきとなるなら、その手を切り捨ててしまえ！とか、もしも、足がつまずきとなるなら、その足を切り捨ててしまえ！ということをおっしゃるからです。…一体、どうして、それほどまでに、厳しいことをイエス様は、おっしゃるのでしょうか？…それは、ここで言われる『つまずき』というものが、滅びを意味しているからです。

どうぞ、ここで、3度も使われてある『ゲヘナ』という言葉に注目してみてください。実は、ここで、『ゲヘナ』と訳されてある言葉は、旧約聖書の「ヒノムの谷」(ネヘミヤ 11:30)、あるいは「ベン・ヒノムの谷」(ヨシヤ 15:8)から出た言葉であると言われてます。その昔、エルサレムの南西にあった、ヒノムの谷では、異教の神々への礼拝が行なわれていたそうで、そこでは、小さな子どもたちをいけにえとして捧げられていたそうです。その後、この場所は、町のゴミや動物や罪人たちの遺体の焼却場に用いられるようになっていったそうです。それを、当時の人たちは、『ゲヘナ』と呼んで、罪赦されることなく、死んでいった者たちが裁かれる地獄と同一視したのです。

有名なみことばは、例えば、**ルカ 12:5**の、『恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。』というみことばで、「殺したあとで、ゲヘナに投げ込む…」とあることから、私たちが死後に受ける裁きについて言われているのは明らかです。また、今日のみことばの 48 節で、「その火が消えることがない」とあるように、これもまた、地獄での裁きを連想させます。

でもね、皆さん。例え、手や足がつまずきとなるからと言って、その手や足を切り捨てたところで、罪を犯さなくなります？…大切なのは、イエス様がマルコ7章で教えてくださったように、私たちの“心”でしょ？

つまり、ここでイエス様がおっしゃりたかったことは、そういった私たちにとって罪の誘惑となるようなものを用意&警戒して、それらを切り捨てなさい！避けなさい！ということなのです。…本当に、忠実な信者という者は、そのように、罪の誘惑となるようなものをできるだけ排除しようとしています。だから、罪を犯しにくいのです。

それと、皆さんは気付いてくださっています。実は、この節をご覧くださいと、44節と46節が飛ばされているでしょ？そのため、欄外の脚注をご覧くださいと、※印があって、<48節と同じことばを加える異本がある>と説明されてありますでしょ？…つまり、それらが、44節と46節なのです。そのように、聖書の写本の中には、この短い部分で、48節の部分で、3回も繰り返し強調している写本があったわけなのです。…つまり、それほど、この48節が強調されていると言い得るわけです。

● 神のために、生きようとする者

でも、一体どうして、そんなにも48節の、『そこでは、彼らを食うじは、尽きることがなく、火は消えることがありません。』という言葉が、そんなにも強調されているのでしょうか？…それは、ここで言われている、罪の誘惑を避けようとするかどうか、あるいは、神のために生きようとするかどうか、という生き方が、その人たちの信仰…、つまりは、救いの有無を試すからです。…違います？

確かに、ここで言われている塩というのは、神様によって変えられたクリスチャンたちのことを指しています。…というのは、私たちクリスチャンたちは、この世にあって、物を腐りにくくする働きをするからです。この当時は、冷蔵庫なんてなかったので、塩が防腐剤の働きをして、大変貴重だったのです。あるいは、49節にあるように、火がそのような働きをしたのです。

確かに、神様によって救われて…、神様によって変えられたクリスチャンたちは皆、この世にあって、塩のような働きをします。…しかし、残念なことに、救われたように見えているだけで、塩のような働きをしない者たちがおります。だから、私たちが、本当に、この世の中にあって、塩気を保っているかどうかを吟味することは大事なのです。…だって、その判断は、私たちの救い…、あるいは、私たちの永遠を左右するからです。だから、イエス様も、今日のみことばで、「塩気を保て！継続しなさい！」と教えるわけです。

<励ましの言葉>

皆さん、覚えてくださっています？…つい最近、あの近藤先生も引用されていましたけれども、**マタイ25**章で、自分の財産を預けて旅に出ていったご主人様は、それぞれしもべたちに、5タラント、2タラント、1タラントという大金を預けましたでしょ？…何の問題も無かったのは、5タラントと2タラントを預かったしもべたちでありました。彼らは2人とも、ご主人様から、『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』(マタイ 25:21,23)と言われました。彼らは救われていたからです。

しかし、1タラントを預かっていたしもべは、どうでした？…そのしもべは、最後、ご主人様から、『悪いなまけ者のしもべだ！』と言われて、外の暗やみに追い出されて、そこで泣いて歯ぎしりするのです。残念ながら、このしもべは救われておりませんでした。それは、この文脈を見たら、明らかです。そうでしょ！

今日のみことばが、私たちに教えてくれていることは、神様に喜ばれる信者というのは、あのイエス様のように、①神様を一番に優先して、自分のことを犠牲にするような信者のことです。また、②素直で、かつ、③へりくだった信者であります。また、もちろん、④神に対して、忠実であろうとする信者です。…と言いますのは、天の神様が、私たちのことを変えていくくださるからです。ですから、私たちが、一番に気を付けるべきことは、本当に、私たちが救われているかどうかです。どうぞ、まだ、この救いに預かっておられない皆さんは、1日も早く、この神様を信じ、イエス様のことを救い主と信じていただきたいと～